

教育メディア研究の温故知新

Discovering New in Educational Media Study by Taking Lessons from the Past

鈴木 克明

Katsuaki SUZUKI

熊本大学

Kumamoto University

要約：本対談では、教育メディア研究の温故知新として、米国のAECTと我が国の状況を比較し、筆者の学びを省察して将来を展望したい。

キーワード：教育メディア研究、AVCR、AECT、教育メディア学会、温故知新

1. メディアかコミュニケーションか

全米教育工学コミュニケーション学会（AECT）の前身であった NEA の視聴覚教育部会（DAVI）がその機関誌を発刊したのが今から 60 年前の 1953 年であった。その機関誌の名称は「Audio-Visual Communication Review (AVCR)」、視聴覚メディアではなくコミュニケーションを冠していた。創刊号の最初の論文でエドガー・デールは、発刊の意義を「コミュニケーションするとは何か。それを考えることは、物書きとして、話し手として、教師として、ディスカッショングループの一員として、また研究者としての自分に重要なことだ」と記している。学会名称が 1970 年に AECT に変更された時にも、視聴覚教育が教育工学に変わったが、コミュニケーションという言葉は団体名称に残された。

翻って我が国では、日本放送教育学会と日本視聴覚教育学会が統合されて、1994 年に日本視聴覚・放送教育学会となり、それから 5 年間を経て「日本教育メディア学会」となった。新しい学会名にはコミュニケーションではなくメディアが冠された。メディアとは「教授事象を具現化するもの」（ロバート・ガニエの定義）であり、それには「教師の口頭」も含まれる。これを国際基督教大学時代に学んだ時、教師がメディアとデザイナーとの二役を担っている、という捉え方が新鮮だったことを今でも鮮明に思い出す。フロリダ州立大学では、メディアは時とともに流行が移りゆくが、設計への体系的アプローチは不変であるという立場から組まれたカリキュラムを学んだ。教育的意図を持ったコミュニケーションの成立・拡大・改善を目指してメディアの利用方法を極める。これが共通点ではないか。

2. 温故知新：歴史は繰り返す？

「夫からのクリスマスプレゼントに iPhone をもらってから、急速にメディアで学習環境が変わっていくことを実感して、メディアへの興味が戻った。」そう語ったのは、2008 年に関西大学で開催された ICoME に招いたグラボウスキ教授であった。メディアがどのように学習環境の構築に関与してきたか、その変遷を振り返り、実現したものと約束されつつも未達成の課題を俯瞰した講演には、多くの示唆があった（翌年の IJEMT に招待論文として掲載）。

ソーシャルメディアの時代だと喧伝されているが、これまで新しいメディアが登場するたびに繰り返されてきた過剰な期待と小規模で一過性のインパクトに反して、「今度こそは違う」と言えるだけの影響をもたらすのであろうか。カナダのメディアリテラシー教育の巨匠ダンカンが亡くなったという訃報を届けてくれたのは Facebook への書き込みであった。少なくとも情報環境はかなり変わった。あとはそれをどう教育や学習に生かしていくのか、その知恵と工夫が求められている。まず本学会がソーシャルメディアを学会の活性化に役立てることから始めることが必要なのかもしれない。

AVCR は ETRD と名称を変えたが、AECT 会員には創刊号から 60 年分の全論文が無料で提供されている。印刷物に依存していた時代には考えられないアクセスの容易さであり、情報時代の恩恵である。新しいものが目まぐるしく続々登場する時代だからこそ、長い伝統を有する本学会が、その過去の遺産から学び直すことを意識する必要があるのではないか。会員諸氏が、容易に学び直しできるような情報環境を整備していくのも本学会の使命だろう。